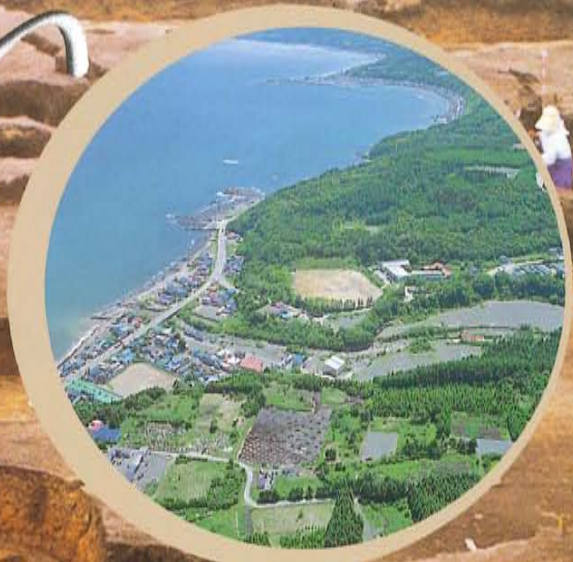


「北海道・北東北を中心とした縄文遺跡群」として
世界文化遺産の登録をめざしています



縄文

Jomon



函館市

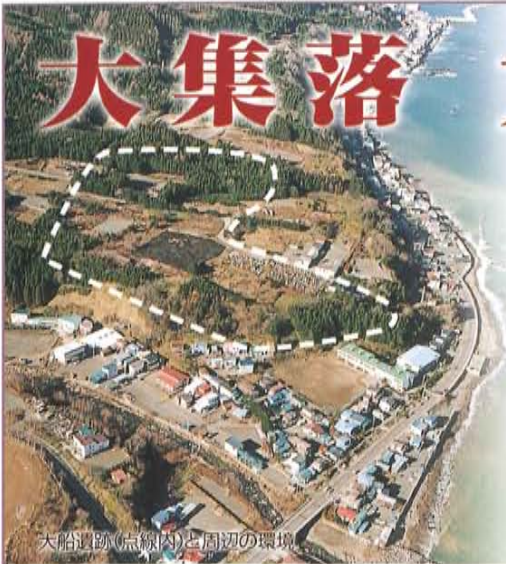
大集落 大船遺跡



国指定史跡大船遺跡の概要

大船遺跡は、大船川左岸の海岸段丘(標高42~47m)にあります。遺跡は縄文時代中期(約4,500年前)を中心とした集落跡で、平成8年度に調査した約3,500m²から、92軒の竪穴住居跡と盛土遺構などが発掘されました。遺跡の主体部が西側に広がっていることから、遺跡全体は非常に大規模な集落になると予想され、平成13年8月に、71,832m²が国の史跡に指定されました。

遺跡の特徴は、住居の規模が極めて大きいことと、集落の密度が非常に高いことです。一般的な竪穴住居跡は、深さ0.5m、長さ4~5m程の大きさですが、大船遺跡では、深さ2.4m、長さ8~11mの大型住居も発掘されています。住居の規模から、安定した縄文の生活が窺えます。



大船遺跡(点線内)と周辺の環境

密集する大型住居跡

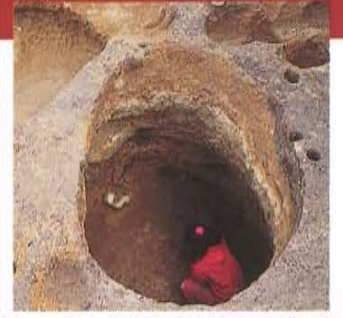


深さ2.4mの大型住居跡

石組炉のある住居跡



貯蔵穴



重複する住居跡

出土したいろいろな遺物

出土した遺物は約20万点で、その多くが住居跡に廃棄された遺物です。試掘調査の結果、盛土遺構には膨大な遺物が包蔵されていることが分かりましたが、現在は未調査のまま保存しています。

出土遺物の中には、土器や石器の他に、ミニチュア土器や漆器・垂飾など、精巧なものも発見されています。また、当時食料としていたクジラ・マグロ・シカなどの骨も出土しています。墓坑からは副葬された個体土器や「10歳前後の男の子」と鑑定された歯も見つかっています。

こうした多くの出土遺物からも、縄文の精神や文化を知ることができます。



個体土器



ミニチュア土器



土坑墓と出土した歯(10歳前後の男の子)



垂飾



刀のように加工したクジラの骨



クジラの背骨

豊かな自然に
育まれた

縄文の里 南茅部

南茅部地域の遺跡

南茅部地域は資源豊富な海と山に囲まれ、また数多くの小河川があるなど、縄文の人々が生活し、文化を発展させる上で絶好の自然環境に恵まれています。そのためこの地域には、縄文時代早期から晩期に至る約7,000年間、連続と縄文文化が栄えていました。発掘された資料の中には、国内最大級の国宝「土偶」（中空土偶）や縄文農耕の根拠となったヒエの炭化種子、専門技術集団の存在を示唆するアスファルト加工工房址など、学術的にも極めて重要なものがあります。また、新潟産のヒスイや秋田産のアスファルトが多量に出土していることから、当時はこの地域が中心的な役割を果たしていたと推測されています。



国宝「土偶」(善保内野遺跡)



遺物が語る縄文の食と文化

これまで縄文人は、獣や魚を捕って暮らす狩猟・採集民で、厳しい生活をしていただわれていました。

しかし、ハマナス野遺跡から縄文時代前期のヒエの炭化種子が発見され、簡単な雑穀の栽培が行われていたことがわかりました。そのほか大船遺跡では、炭化したクリの実や、クジラ、オットセイ、マグロ、貝殻、珪藻土などさまざまな食べ物の痕跡が発見されており、当時の食生活が豊かであったことがわかります。

安定した生活基盤を背景として、漆器やヒスイの加工、また接着剤としてアスファルトを利用するなど、高い技術が確立されます。さらに、子どもの足形を付けた足形付土版の製作や香炉形土器の使用などから豊かな精神性もうかがえます。



縄文時代のアスファルト塊(上:豊崎N 下:磨光B遺跡)



漆塗り注口土器(垣ノ島A遺跡)



注口土器と下部有孔土器(八木B遺跡)



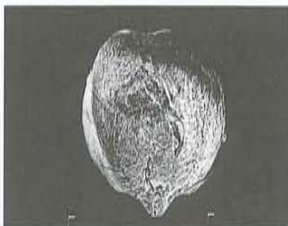
香炉形土器(垣ノ島A遺跡)



ヒスイの垂飾



環状耳飾り(八木A遺跡)



ヒエ(ハマナス野遺跡)



クリ(大船遺跡)



足形付土版(垣ノ島A遺跡)



オットセイの牙(大船遺跡)



マグロの骨(大船遺跡)



珪藻土(大船遺跡)

約9000年前の漆の装飾品(垣ノ島B遺跡)



年 表

9,000年前	6,000年前	5,000年前	4,000年前	3,000年前	2,000年前
早期	前期	中期	後期	晩期	
川汲A遺跡 川汲B遺跡 垣ノ島B遺跡	八木A遺跡 ハマナス野遺跡	白尻B遺跡 大船遺跡 川汲A遺跡 木直C遺跡 垣ノ島A遺跡	豊崎N遺跡 磨光B遺跡 著保内野遺跡	大船A遺跡	
●押型文土器、 貝殻文土器が つくられる ●漆が使われる	●円筒土器文化が発達し、大規模集落がつくられる ●盛土遺構がつくられる		●ヒスイ・アスファルト 等が持ち込まれる ●ストーン・サークルがつくられる ●中空土偶がつくられる		

この地域に初めて縄文人が住んだのは、今から約9,000年前。川汲A遺跡ではその証拠となる押型文系の土器と竪穴住居跡が発掘されています。その後、縄文海進と呼ばれる温暖化現象を経て、前期・中期を代表するハマナス野遺跡、白尻B遺跡、史跡大船遺跡などの大規模な集落が形成されます。また後期・晩期になると、人々の精神文化は高揚し、土偶やストーン・サークルがつくられるようになります。交易も盛んとなり、ヒスイやアスファルトも遠隔地から入ってきます。

遺跡と発掘調査

南茅部地域には現在(2009.4)、91カ所の遺跡(埋蔵文化財包蔵地)が確認されており、その面積は延べ約160万m²に及びます。

初めて学術的に調査されたのは、昭和38年の函館中部高校による黒鷲遺跡の発掘です。その後、昭和48年に国庫補助事業によるハマナス野遺跡の本格的な調査に着手してから今日まで、発掘を継続しています。これまで発掘した遺跡数は30カ所以上、その発掘面積は10万m²に及びます。その間に出土した遺物は400万点を超えており、なかには国宝となった著保内野遺跡出土の「中空土偶」(縄文時代後期)など、多くの貴重な遺物もあります。これらの縄文遺跡群は平成13年、北海道遺産に認定されています。

位置と地勢・交通

南茅部地域は、北海道の南に伸びる渡島半島に位置し、東経140度58分・北緯41度54分、町並は太平洋に面し、細長く延びています。

表日本型の気候を示し、寒さの厳しい北海道のなかでは、比較的温暖で過ごしやすく、本州に近いため初夏には梅雨があり、夏は雨が多いのが特色です。

交通手段は、函館駅までバスで約1時間(34km)、函館空港までは車で約35分(25km)などがあります。

函館市教育委員会

函館市縄文文化交流センター

〒041-1613 函館市白尻町551番地1

TEL:0138(25)2030 FAX:0138(25)2033

HPアドレス <http://www.hjcc.jp/>

